

授業中に、学生時代を思い出して恥ずかしくなることがあります。例えば初級統計の講義。先生がしきりと訴えるのです。「B社のシェーバーのCMあるでしょう？ 通勤途上のサラリーマンを捕まえて髭そってもらって、『朝ちゃんと剃ってきたのに、こんなにヒゲ屑が！ やっぱりシェーバーはBじゃないとダメなんですねぇ！』ってやつ。あれ、全然ダメですから。みんな信じちゃダメだよ！」。先生、何をそんなに熱くなってるんだろ？ なあなんてノンビリ考えてました。そう思って今の学生の顔をみると、当時の自分とたぶん同じ顔をしている。

今なら先生の気持ちも分かります。だいたい忙しい朝の通勤中に声をかけられて街角でヒゲそる人がいるのがおかしい。他社のシェーバーでもやって比べないと、B社が優れているかは分からない等々。脇の甘さに熱いツッコミを入れたくなります。でもそれはこの業界に長いから分かること。トレーニングを受けていなければ、簡単にいろんな因果関係があると思ってしまう。トンカツ食べたから試合に勝てたとか、ディズニーランドに行ったせいで別れたとか、国家資格法案を出したせいで国会が解散したとか。

それでもトンカツ食べて気持ちが集中できるなら、それも結構とも思うわけですが、権力とかお金とか生命とか関わってくると、そうとも言ってもらえないわけで、例えば薬を開発する現場では、随分昔から、ここいら辺をちゃんとやってきました。新薬キタ！ って思ったら、プラシーボと比べてみる。何の効果もない（はずの）デンプンだけの薬と、有効な（はずの）成分が入った薬を比べてみて、有効成分が本当に有効か調べる。だいたいプラシーボだけでもそこそこ効くわけです。製薬会社が言ってますもんね。パ〇ア〇ンの半分は優しさだって。

それがどうも、近年ますますプラシーボの効果が強くなっている疑いがあるそうです。例えばDunlopさんたちの研究（Dunlop et al.,

2012）。抗うつ剤の臨床データを分析してみたら、年を追うごとにプラシーボの効果がだんだん強まっている。Tuttleさんたちは頭痛薬について調べてみて、同じような結果（Tuttle et al., in press）。効果がない（はずの）薬の効き目が近年ますます強くなっている。

理由はまだはっきりとは分からないようですが、色々悩ましい話のようです。抗うつ剤については、大学での臨床試験が年々減っていることが、プラシーボ効果の増強と関係するらしい。大学病院の患者さんは、余所で治療効果があまりなかった人が多くなりがち。つまりプラシーボが効きにくい人が多いんじゃないかなとか、いろいろ推測されてますが、詳しくは論文を読んでみてくださいね。

頭痛については、プラシーボ効果は米国だけで強くなっている。実は米国でだけ、臨床試験の大規模化・長期化が進んでいて、これが「悪さ」をしているらしい。プラシーボを飲み続けていると、12週間くらい、継続して痛みが下がっていくんだそうです。もちろん“真”薬を飲んでも痛みは下がるのですが、痛みの低下は4～6週間で落ち着いてしまう。つまり試験を長くやればやるほど、プラシーボの効果が新薬に追いついてきてしまうのですね。じっくり時間をかけて調べるほど裏切られるというか。製薬会社の肩を持つ気もありませんが、世の中、ままたまらないものです。結果的に患者さんの痛みが減っていたことが救いでしょうか。



Profile — 平石 界

東京大学大学院総合文化研究科博士課程退学。東京大学、京都大学、安田女子大学を経て、2015年4月より現職。博士（学術）。専門は進化心理学。